

杉原(吉岡)たみの旅路

吉 岡 康 子

武士の娘から青山へ

杉原たみは、1878年（明治11年）4月8日に山形県上山の「士族」杉原千尋（成直）とれいの長女として誕生した。父は上山月岡城松平家の家臣で生家は上山城をのぞむ「武家屋敷」の一角にある。子どもの時から優れており「男の子に生まれれば良かったのに」と言われていたそうである。たみの5歳年上で新潟長岡藩家老の娘として育てられ、後に東京英和女学校普通本科を1893年（明治26年）に卒業した杉本鉞子が自らの体験に基づいて執筆した『武士の娘』に次のようにある^①。

子どもの頃から、女が男に劣っているということは強く教え込まれていました。そしてそれは運命と思っていましたから、疑ったこともありませんでした。けれども年を重ねるにつけ罪もない人に不幸が重なって困っていることをたびたび見るにつけて、子どもの粗雑な考え方ではありましたが、冷酷な運命という大きな力について思い惑うようになり、ついに、私の心は、淡いながら反抗に近い気持ちをもつようになりました。

同じような心情があったかどうかは推しはかれないが、たみが子どもの時に8歳年上の兄、杉原成義を頼って雪の夜に福島まで歩くつもりで家出をし連れ帰られたというエピソードが伝えられている。

この兄、杉原成義の生涯は以下である^②。

1870年（明治3年）に杉原家の次男として生まれ、山形尋常師範から米沢中学校に転じた頃キリスト教に接し、1885年（明治18年）5月10日米沢（米沢明星）教会で古坂啓之助から受洗。このため両親、親戚、友人から迫害を受けたが屈せず、伝道者を志して東京英和学校神学科に入学。1892年8月卒業。名古屋第二、盛岡（盛岡松園）、山形（山形本町）のメソジスト教会の牧師を歴任。1902年6月渡米。ポートランドの日本人教会牧師を務めまたドルー神学校に学んで札幌教会に7年在任、12年東京本郷中央会堂牧師、16年（大正5年）4月名古屋中央会堂（名古屋中央教会）牧師となった。初めに反対した両親や親戚ものちにキリスト教を信ずるようになったという。

成義とたみの生家数軒隣に上山教会があり創立の由来は以下である^③。

1881年（明治14年）新潟中条町でパーム、T.A.より受洗し、山形県上市市に帰って写真業を営んでいた旧藩士小池侶乃信が、86年に寺の住職京極茂記とキリスト教演説会の開催を計画し宣教師デヴィットソンを招いたのに始まる。デヴィットソンは1ヶ月近く滞在して、中十日町の京極家を集会所として伝道を開始し、小学校教員大岡勘次郎や京極をはじめ12名に授洗した。11月には伝道師上野松次郎が着任して日本基督一致教会上山講義所が設立された。

上山伝道が開始された時には成義は米沢に在住していたようだが、たみは8歳で、ここでキリスト教と出会った可能性も考えられる。（上山教会の資料にはこの両名は見出せない）杉原家の菩提寺曹洞宗寿仙寺の「過去帳」では杉原家の家系図から成義・たみは削除されていたことから、キリスト者となったことへの「迫害」の一端がうかがわれる。

家族の追想によればたみは築地海岸女学校に入学、1900年（明治33年）に西澤（吉田）ゆき、古川とく、三浦（小室）かね、田宮つぎと共に卒業、引き続き教師として学校に残ったとある。

当時の母達の先生飯久保冬夫人が95歳でご健在なのは誠におめでたいことである。母はアレキサンダー夫人に大変可愛がられ、師弟の関係は長く続いた。私共は大正5年の夏御殿場のアレキサンダー家で一夏過ごしたことがある。父が東北部長時代に教職者にクリスマスプレゼントを贈るために毛布を売ったことがあるが、これもアレキサンダー夫人の御世話で輸入したものである。

青山女学院高等科全科卒業生名簿には、確かに「山形士」(士族出身の略と思われる)（吉岡）杉原たみとの記録があるが、入学したのが海岸女学校なのか、東京英和女学校だったかは不明である。1889年（明治22年）には東京英和女学校が開学しており、海岸女学校は後に合同し、1894年（明治27年）閉校している。東京英和女学校は1895年（明治28年）青山女学院と改称。当時の学校制度は確定しておらず、生徒の入学時期もまちまちであった。また山形の家族からの援助があった否かも不明である。卒業後に教師として勤務していたことは「教え子」の文章が残されていることから確認できる。

学生時代の様子などの記録は残っていないが、1934年（昭和9年）の「青山女学院校友会会報」に「7代目校長ミス・ウキルソン（現アレキサンダー夫人）」との文章が記されており、当時の様子が垣間見える。^④（抜粋）

歲月流るるなどという言葉がいよいよしみじみと感じさせられる今日この頃我が愛する母校が早60年の祝いの日を迎えるに至ったとは、実に感慨無量又何たる感謝でしょう。今日では一大宗教女学校とし帝都に輝くことは

実に喜びの極みでございます。ミス・ウキルソンは明治20年に父君・兄君と一緒に世界漫遊の途上、日本に立ち寄られ、非常に西洋の先生の手不足なのを痛感され、明治21年に3ヶ月遺愛女学校で、6ヶ月横浜成蹊小学校で教鞭をとられました。明治26年に青山女学院の教授として来られ親しく寄宿内に寝起きし、ただ教室内の英語教授のみならず、教室外のお世話特に宗教上の薫陶に力を込めてくださいました。校長であられたのは明治33年より36年までかと思いますが、実に春風和気満ち満ち我々生徒はあたかも慈母の下にある気持ちで楽園そのものでした。教職員のある方が「ミス・ウキルソンの温顔に接すると何も不平などは言えなくなります」と言われたことさえありましたが、実にその通りでございました。当時生徒の数は250人位かと思いますが、全く一家族のようでした。前青山学院院長と石坂先生は当時万国歴史を私どもに教えに来てくださいましたが「ウィルソン先生は温厚な人めづらしい人ですあー」とあの調子で感嘆なされたのを記憶しております。

『青山女学院史』によれば、ミス・ウィルソン（Wilson, Farney G）は青山女学院第3代校長である。（以下抜粋）^⑤。

温厚な人柄で、退職後、宣教師アレキサンダー（Alexander, Robert Percival）と結婚、青山学院内に住み、婦人会運動に尽くし、永年全国母の会会長をつとめた。その間弘前女学校校長として2年間奉職した。トニック・ソル・ファ方式声楽を母校に初めて採用した声楽家である。昭和32年90歳で永眠、多摩墓地に葬られた。娘イザベルも青山女学院の音楽・英語の講師であった。

ちなみに全国母の会とは日本全国の母に呼びかけて組織したもので、1934年（昭和9年）頃には会員7000名であった。また今日守られている母の日は1912年（大正1年）ドレーパー夫人によって日本に紹介されたが、それを広め育成

したのが彼女である^⑥。

ミス・ウイルソン、後のアレキサンダー夫人との交流は生涯を通じたものであった。青山女学院で出会った恩師は、女性として生きる「ロールモデル」となり、たみのその後の人生に大きな影響を与えている。

アメリカでの日々

1893年（明治26年）に吉岡誠明が青山学院神学部に入學した。

吉岡誠明の生涯は以下である^⑦

吉岡誠明は、1873（明治6年）年5月4日長崎県諫早市郊外の靴屋を家業とした藤蔵といねの次男として生まれた。若くして生母に死別し、家業が傾き小学校を終えた後中学に行けず役場の給仕をした後に、長崎に出て鎮西学院の前身カプリ英和学校に入學しキリスト教と接する。1893年（明治26年）卒業後直ちに青山学院神学部に入學し1897年（明治30年）卒業、卒業前に福岡県若松に伝道し、それを礎に若松教会が設立された。その後米国ドルー神学校に留學し、同校卒業後コロンビア大学でサンスクリットを修め、インド哲学を専攻。1904年（明治37年）杉原たみと結婚。ポートランド教会牧師を1年、シアトル教会牧師を8年間務めた後、1913年（大正2年）に日本に帰国。青山学院教会、三田教会の牧師を歴任後1921年（大正10年）日本メソヂスト教会東北部長として行政的手腕を発揮。1924年（大正13年）に銀座教会牧師に任命され、関東大震災からの銀座教会の復興の重責を担う。1933年（昭和8年）日本メソヂスト教会伝道部長に転任。1936年（昭和11年）に世田谷の自宅で開拓伝道を開始し、これが後に玉川平安教会となる。1936年～1937年青山学院理事長
1940年（昭和15年）10月19日召天。

杉原たみと吉岡誠明とは「青山キャンパス」でどのように出会ったのかは定かではないが「吉岡先生夫妻は本多庸一先生の媒酌で結婚され、子弟の関係は極めて密であった」と記された文章も残されており、婚約式も本多庸一の司式により行われている。米国留学前に婚約し誠明はドルー神学校に、たみはボルチモア女子大学（現ガウチャー大学）に留学する。結婚は杉原家からは「九州の平民の牧師との結婚などんでもない」と反対されたと言う。また兄杉原成義の1902年の渡米が山形における初期の留学生と記録されていることから、たみの1900年頃の米国留学は山形出身女子留学生の先鞭であったことが推測される。

ボルチモア女子大学は青山学院と深い関わりを持つガウチャーにより1885年に設立された大学である。ふたりの留學生活についての資料はほとんどないが、家族の手記によると「父は不器用だったので、アルバイト等はあまりできなかったらしく、スカラシップだけを頼って2、3日断食したこともあったそうだ。それに引き換え、母は留學中に日本から雜貨等を取り寄せて學資を稼ぎ、ボルチモアの大学を卒業した」とある。また二人の婚約時代についての微笑ましいエピソードが孫の一人によって記されている。

最後に、祖父母についての、私の大切な思い出をご披露しましょう。青山学院大学に入って、少し文学をかじるようになり、祖父の書棚に何か神學書以外の面白い本はないものかと物色しに行った時、私はとても楽しい発見をしました。それは“POETICAL WORKS OF ELIZABETH BARRET BROWNING”と言う分厚い一冊の詩集でした。表紙を開けると、大きな太い字で、To T.S From S.Y. 1902 Christmas.と記されており、ルカ伝2章14節がギリシャ文字で書かれてありました。「T.S.」もちろん、たみ杉原、結婚前の祖母の名前です。結婚前の祖父から祖母へのクリスマス・プレゼント。婚約者から、こんな素敵な本を贈られるなんて、おばあちゃんは何て幸せなのでしょう！2人はきっと素敵な恋人同志だったに違いな

いと思うと、私の心までほのぼのとしてしまいました。こんなおじいちゃん、おばあちゃんを持ったことを本当に嬉しく思います。

2人は、1904年（明治34年）5月7日、ニューヨークのユニオン神学校の講堂において結婚式を挙げた。スーツとドレスの結婚式の写真が残されている。誠明31歳、たみ26歳であった。結婚後赴任したポートランドで1905年長男アダムス誠が誕生するが、生後3日で召天しマウントテーパー墓地に埋葬された。「妻の悲しみを忘れさせようと、シアトルに任地を変えてもらったらしい」との記述がある。

シアトル在任中の様子は関係者の文書が多く残されている。

吉岡誠明牧師はシアトル日本人メソヂスト教会（現在はブレイン記念メソヂスト教会）の二代目牧師として1905年10月3日に北米ワシントン州、シアトルにご夫人と共にご来任、前任牧師鶴田源七先生の後を引き受け、伝道・教育・教会事業に懸命の努力を捧げて下さった。先生の信仰、教育的背景、および人格の感化は教会の内外に多大の影響を与え、キリスト入信者の数は日に増し加わり、日曜学校・青年集会・夜学校等の諸集会のために、新会堂の必要に迫られ、遂に1912年に、かつメソヂスト教会本部の援助を受けて、当時の日本人メソヂスト教会中、最大なる大教会の建立を完成して下さいました。

シアトル在任中、1906年長女明子（4月1日生まれなのでエイプリルフルだと皆が信用しなかったとの逸話あり）、1908年次男襄、1911年次女礼、1912年三男孝が誕生する。その養育にあたりながら、たみは当時の若い多くの渡米者のために尽力した。

当時は新渡米の若い人が多く、学生もたくさんおりましたが、吉岡先生は

親しみのある暖かい方でありました。ことに夫人は先生と同じ心で協力して、良く若い信者のお世話をなさいました。一例を申しますと、礼拝が終わる頃にちょうどランチタイムとなります。夫人はいつの間に用意されたのでしょうか、隣接の牧師間の食堂に一堂を招かれ、暖かいごはんにみそ汁、つけもの、或る時はサモンからおにしめなぞ、故郷なつかしい味を添えて一同に昼食を供され、西も東も知らない新渡米の私なぞ第一回教会出席のその日からこの客となり、親しい友の交わりの中に加えて頂き、心温まる思いが致しました。私は教会は建物ではない、愛の実行こそ教会の第一義だと教えられました。

さらに吉岡夫妻はシアトルの日本人社会の発展に伴い起こってきた問題のひとつである「日本からの婦女子の誘拐」問題にも取り組んだ。

当時早くから渡米して居られた方々が、日本内地から娘さんを養女として呼び寄せ、表向きはウェイトレスとしての働きなれども、実にいかがわしい職業をさせられていた。これらの婦人を探し出して正道に導かんため非常にご苦労をなさいました。

本多庸一が1905年（明治38年）と1910年（明治43年）の2度シアトルを訪問した際の歓待への感謝の手紙の中に「メイン街のミッション婦人ホームの客室に、賑々しく茶菓を饗せられ後、広き一室に安眠せるは感謝の至なりき」とある「ミッション婦人ホーム」を吉岡牧師夫妻が設立し、日本から渡米し困窮状態にある女性たちのために尽くしたことがうかがわれる。

開かれたホーム

1913年（大正2年）に帰国してから、1914年（大正4年）三男正、1918年（大正8年）四男の淳が誕生した。三田教会、銀座教会、世田谷における「開

拓伝道」においても「典型的牧師夫人」としての生活を送った。吉岡牧師を「パパ」、たみは「ママ」と家庭でも教会でも呼ばれ、日曜日はもとより家庭には常に家族以外の人々が入り出していた。以下教会関係者からの追想をいくつか紹介する。

(三田教会に吉岡牧師を迎える時) 奥様は青山をお出になって、アメリカに11年もいらした方だから、とてもしっかりしてこわいわよ、そのつもりでしっかりしなきゃだめよ、とか何とか、婦人会の方におどかされたものです。(略) 奥様もいつもにこやかな、親切な行き届いた良いお方でした。「聞くと見るとは大違い」。私は心から嬉しくなって安心しました。このことは、やがて御転任のとき婦人会の送別会で申し上げたので、奥様は大笑いされたことでした。

奥様もまた実に立派な方で文字通りの良妻賢母であられた。教会の世話、の世話を実に良くされていた。御自分の御子様方が6人もおありで、その御世話だけでも大変だったろうに、いつ伺っても御宅には多勢の大人や子供が入れ替わり立ち替わり出入りしていた。そして皆が心から楽しそうに幸福そうに談笑していたのを思い出す。

誠明先生が公職を辞されて世田谷奥沢のご自宅で伝道所をおはじめになった際、私は再びお世話になった。その頃も以前と同様会食、お茶の会は常にあり、そのうえ日曜学校のためにはお家の各部屋を解放されるなど、全くプライバシーはなかった。どの部屋にどんな家具家財があるかまで判り、判らないのは筆筒の引き出しの中身のみ、財布の中身は想像に難くなかった。英国人は「自己のホームは自分の城であって無断で他人の介入することを許さない」と言うが、聖職に献身された吉岡先生ご夫妻はその「城」を持つことをされなかった。

母がよく人の世話をしたことは父の項で書いたが、失敗の後始末もあった。結婚がいやで飛び出したお嫁さん、夫婦げんかの仲裁から、子どもの取りあいのなかに入って子どもを預ったり、今の人には出来ないことである。息子夫婦の家に居づらくて出てきたおばあさんのお世話にはさすがの母も困っていた。

青山女学院校友会での働き

1940年（昭和15年）10月19日、吉岡誠明召天。67年の生涯であった。その後たみは青山学院校友会の第3代会長に1943年（昭和18年）就任した。戦時中であるこの時は総会の開催は不能であったが、青山学院会報54号には会長としての巻頭言が寄せられている^⑧。

宣戦の大詔を拝し奉つてよりここに一年、晴れ渡った冬の空を仰ぐにつけ、あの朝の感動を思い起こします。5000の校友のご家族の中には父君を、又は御主人を、又は御兄弟を遠く征野にお送りなさいました方々の、数多く在りますことを承り、御武運長久祈り参らせると同時にご労苦のほど感謝し尽くせぬ思いが致します。国内にも一年の間に長期戦にそなえる覚悟と態勢がいよいよかためられた感じがいたしますが、まだまだ私共には努力する余地があると存じられます。この時代に校友生がいよいよ力強く、一人一人の本分を覚え、若き日に母校にて訓えられました奉仕、献身の精神を以て、香り高く国に報ずることの出来ますよう、ロマ書5章にあるように「しかのみならず患難をもよろこぶ」との凜とした気概をもって日々の生活を築きたいものと存じます。校友の皆様の上に父なる神様の御恵みと、お導きと、御慰めのありますよう、お祈り申し上げて巻頭のご挨拶といたします。

かつて学びの日々を送り、結婚し、生活した国との戦いの中にあることには多

くの思いや葛藤があったはずであるが、そのあたりを窺わせる資料は見当たらない。戦後1947年（昭和22年）青山学院新聞21号に「青山学院女子校友会会長」として寄稿している「祈りの中に」という小文に以下のようにある（抜粋）^⑨

私たちの麗しき母校青山学院は戦時中の著しい災難のため見る影もないような焼け野原と化し、また私共の永き伝統に基づく当学院創立の根本精神は、呪わしき軍国主義に蝕まれその物心両面における打撃は、殆ど再起不能を思わしめるものがあったのでありますが、戦争が終わるや時を移さず教職員生徒一九〇九人となって学院の復興に着手し、当初の予想以上でありますことは皆様と共に同慶至極と存ずる次第であります。私たちの校友会も女学院史70年史の編纂を意図して諸先生の献身的努力をいただいておりますが、戦争勃発、貴重な材料をはじめ校友会の名簿その他の記録の一切は灰塵に帰し、私たちは失意落胆いたしました。私たちの恩師ミス・チニー、ミス・ベイリーやその他の先生方をお迎えしてそのご指導を仰ぐことが出来るようになりましたことは私共にとりましては百万の友を得たと等しき力強さを与えて下さるのであります。私共はこの先生方が心おきなく十分にご活躍出来ますようにとの敬意からご住宅の建築を思い立ち、既にその募金に着手実行中なのであります。

ここにあるように1947年（昭和22年）6月にたみは戦争で中断されていた総会を再開するために新聞広告を出し、戦後初めての総会を開いた。この時はプラット記念講堂以下構内の建物はほとんど戦災で使用不能となり、僅かに焼残った学院講堂を借用して行い、戦後いち早く来日してこの会に出席したミス・チニー、ミス・ベイリー両師に歓迎の花束を贈呈した。

1948年（昭和23年）たみは自宅で校友会役員会を開き、学院に新設された復興局から依頼された校友会から復興費150万円の募金方法について協議した。一つはバザーによる利益10万円。当時日常生活に最も貴重な食料品・衣料品などを扱い、責任者は宿直して保管の安全を期した。この利益金10万円という金

額は終戦直後経済難の状況の中では注目すべき金額であった。今一つは音楽会による利益金12万円。以上の催事の他に長期継続の事業も計画した。この頃活躍したグループに「みどり会」「つばくろ会」「どんぐり会」があるが、「どんぐり会」の活動にたみは特に晩年まで注力した。

「どんぐり会」は大正10年高等女学校卒業生の会で丸山千代を中心に集り、学院復興局との間に約束した復興費の一部として30万円を捻出のため1949年（昭和24年）5月食堂経営を始めた。場所は当初、学院本部図書館一階の一隅であったが、後正門左側通称長屋の一室に移り、25年10月からは女学院校友会事業部がこれを引き継ぎ、小林ちよが経営の任にあたった。こうして28年6月までに学院復興局との約束目標額を完納した。一応責任を果たしたこの機会に経営主任を遠藤いち（明治43年高等部普通科卒）に交替した。どんぐり食堂は「母心」をモットーに家庭料理を提供して学生に喜ばれ、業績をあげた。この後、毎月3万円を本部負担金に納め、残金を積み立て、この積立て、この積立金は後日大磯さゆり荘敷地購入資金の一部となった^⑩。

たみは、1943年（昭和18年）から1950年（昭和25年）の戦中戦後の困難な時期に青山女学院校友会会長として尽力した。1950年（昭和25年）に最初の学校法人青山学院評議員を青山学院から選出した結果、会長吉岡たみ、岩崎英子、花沢常子、長山トシが選出された。特にたみは、校友会選出の学校法人青山学院評議員の比率につき、男子側は男8対女2を主張して来たが、女子側は5対5を主張し、両者の意見が対立した時小林千寿と共に努力して漸く男子6対女子4の割合に落ち着かせることができた^⑪。

『青山学院女学院史』の「校友会略史」吉岡たみの紹介の最後は以下である。

吉岡会長が果たそうとしたことは戦後の新時代に対処すべき校友会の在り方を打ち出すことで、この改革問題と取り組むうちに惜しくも健康を害し1951年（昭和26年）4月16日に世を去った。葬儀には校友多数参列、校友

会は謹んで弔意を表した。この時遺族から贈られた金一封は本会の友情資金の基礎となった。

たみの葬儀は1951年（昭和26年）4月18日玉川平安教会において日野原善輔牧師の司式によって行われた。73年の生涯であった。

現在青山学院女子短期大学の様々な年代の卒業生から聞き取り調査を行う「青山学院における女子教育の検証—オーラルヒストリー・プロジェクト」が行われている。女子短期大学を卒業生が学生生活においていかに多くのことを学び、その恵みの宝を活かして人生を生き活きと切り開いて歩んでおられることにふれることは、感じざるをえない短大閉学という事実を巡る様々な思いを乗り越える希望、慰めとなっている。卒業生の多くの方々が語られるのは、自分は神に守られているという思いあるいは神から導かれている、誰かに祈られ、支えられているという安心感、受容感である。ある人はこれを「根拠なき自信」という言葉で表している。「自信」とは「自分に対する信頼」を意味するが、「根拠なき自信」とはその自信の根拠が自分の内ではなく外にあって、それが外から自分を支えているということであろう。そこでの自信とは「自分を支えるものに対する信頼」、すなわち自分の外あるいは根底、底の底に自分を支える確固たる足場、基盤を持つということであろう。

杉原（吉岡）たみの人生を調べるにあたり彼女の「武士の娘」としての自意識や矜持のようなものがその人生にいかに見てとれるかが出発点であったが、これが残された記録は僅かであった。

叱ることもほとんどない優しいパパだったが、不機嫌らしい顔といえば、山形の士族出だった母が武士の家系のことに及び、少し話がエリートになりそうな気配の時とか、子どもにうっかり「そんなことをしては今に罰が当たるよ」と母が叱ると、必ずパパは固い表情で「罰などというものはない」とママをたしなめたことがあった。

たみの人生においては「開かれたホーム」「共に食卓を囲む」「隣人に仕える」「女性たちとの助け合い」「共に喜び共に泣く」「共に生きる」「分かち合う」姿勢が貫かれている。城を見上げながら育ったたみは、多くの人々に開かれた「ホーム」を各地で作った。その原点は青山女学院での「大きな大家族」として過ごした日々であったと思われる。冬の夜に旅立ちを決意した少女が、やがて青山で信仰という確かな根拠を与えられ、アメリカへと羽ばたき、そして関東大震災、戦争で被災し、戦後青山女学院と青山学院の復興に尽力したその旅路をさらに今後も調査し、その生涯と信仰が遺したものを追求めてみたい。

「私たちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に存続するからです。」

コリントの信徒への手紙Ⅱ 4章18節

-
- ① 杉本鉸子『武士の娘』（ちくま文庫）
 - ② 『日本キリスト教歴史大事典』（教文館）
 - ③ 同上
 - ④ 『青山女学院校友会80年史会報』
 - ⑤ 『青山女学院史』
 - ⑥ 前出『日本キリスト教歴史大事典』
 - ⑦ 『銀座教会100年史』
 - ⑧ 「青山学院校友会会報」54号
 - ⑨ 「青山学院新聞」21号
 - ⑩ 前出『青山女学院史』
 - ⑪ 同上

家族や知人の文章は『吉岡誠明牧師追想』1996年による。